

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2026年3月20日

No.155



田んぼや用水路の魚をつかまえる漁具
左からザッコミ、ウナギドウ、ドジョウドウ

もくじ

- 1-2 田んぼとくらし
その4…田んぼで魚をつかまえる
- 3 展示会案内
企画展 江戸時代の冠婚葬祭
- 4-5 NOTE
猿渡盛章の官位申請・取得
- 6 series 戦後80年-府中と戦争
④戦時下で働く児童・生徒
- 7 最近の発掘調査
「鷹」の墨書土器を発見
- 8 天文はじまり物語
④日本の宇宙開発のはじまり

田んぼとくらし

かつて府中市内にはたくさんの田んぼがありました。そこは単に米づくりの場所というだけではなく、さまざまな役割や用途がありました。そうした府中の田んぼと人々とのかかわりを4回にわたって紹介してきたシリーズの最終回です。

その4…田んぼで魚をつかまえる

府中の田んぼは、多摩川から水を引いて稲作を行っています。かつては用水路を通じて、川に棲む魚が田んぼへたくさんやってきました。そのころは上の写真ぎょくの漁具を使って、田んぼや用水路にいる魚をつかまえました。

田んぼとくらし

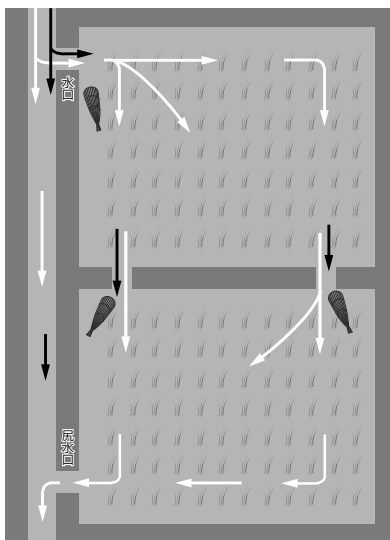
その4…

田んぼで魚をつかまえる

1960年代までお米だけでなく、二毛作で麦もそだてていた田んぼですが、実は魚とりも行われていました。そう聞くと意外に思われるかもしれませんが、しかし、府中の田んぼは用水路から多摩川の水を引き込んでいるので、その流れに乗って川からドジョウやフナなどがやってきます。

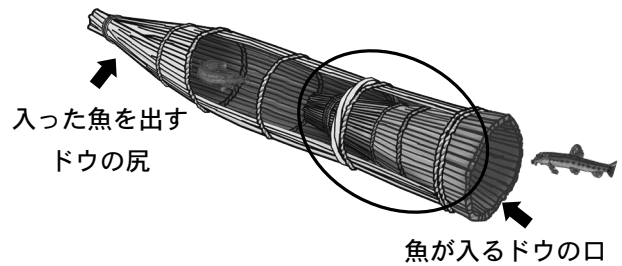
田んぼを持つ農家はやってくる魚を表紙写真にあるドウという漁具（ワナ）を用いてつかまえました。これは裂いた竹を円筒形に編んだもので、片側（ドウの口）には入った魚を逃がさないためのカエシがあります。仕掛ける時はカエシのついていない方（ドウの尻）をタガやヒモで縛り、魚を取り出す時は緩めます。

田んぼでつかまえる場合は右側のドウを使いました。主にドジョウを狙うことからドジョウドウといいます。用水路から田んぼに水を入れる時は、ドウの口を水口（取水口）に向けて仕掛けました。そうすることで水の流れに乗って入ってくる魚をつかまえることができたのです。これを「ノボリドウをうつ」といいました。一方、田んぼの水を出す時は「クダリドウをうつ」といい、ドウを尻水口（排水口）に仕掛けて用水路へ出ていく魚を狙いました。



ノボリドウをうつ時のドウの向き
⇨が水の流れで、⇨が魚の動き

また、田んぼと川をつなぐ用水路でも魚とりが行われました。そこには、田んぼに入ってこない大型のコイやナマズ、ウナギなども生息していました。これらをつかまえるためには、少し大型のドウが用いられました。なかでもウナギ



ドウの構造
丸のところが魚を逃がさないためのカエシ

は細長くヌルヌルしていることから、カエシが1つのドウでは逃げられてしまいます。そこで表紙写真の中央にある、カエシを2つつけたウナギドウを仕掛けました。

用水路では、ほかにも表紙写真の左側にあるザッコミという漁具も使われ、これを用水路のなかに置いて、足で魚を追いこみました。また、秋に水門を閉じて、用水路にたまった水をかき出し、そこにいる魚を手で掴むカイボシという方法もありました。

つかまえた魚は、高く売れるウナギを除いて、農家の食卓を彩るオカズになりました。調理の前には、きれいな水を張った甕や桶、盥などに入れて、泥を吐かせます。その後は、小魚は醤油で煮つけたり、ドジョウは汁物の具材にしたりして食べました。こうした魚の調理方法を農家さんにたずねると、田植え直後のドジョウは骨まで食べられた、夏後半のドジョウは大きくて味もいいが骨は硬くて難儀した、などという話で盛り上がります。

1970年代以降は農薬の利用によって、魚が田んぼから姿を消していきました。それにともない、田んぼや用水路で魚をつかまえることも行われなくなったのです。

市内のある農家さんは、田んぼでつかまえたドジョウの味が懐かしくなり、鮮魚店から購入したドジョウで料理を作ったそうです。しかし、それはかつて食べたものと風味が違ったといいます。いまとなつては府中の田んぼでとれたドジョウを食べる機会はありません。どんな味がするのか大変気になるのですが、またいつか食べられる日はやってくるのでしょうか。（荒一能）

江戸時代の冠婚葬祭

～誕生から供養まで～

4/18 (土) ～ 7/5 (日)

会場：本館2階 企画展示室

市内住吉町の旧家である内藤治右衛門家には、江戸時代後期の冠婚葬祭の際に作成された帳簿や日記が残されています。

本展示では、内藤治右衛門家から寄贈された江戸時代の資料を中心に紹介しながら、当時の冠婚葬祭がどのようにおこなわれていたかに迫ります。

「冠婚葬祭」はもともと、4つの重要な儀礼である、冠＝元服、婚＝婚礼、葬＝葬式、祭＝供養を表す言葉でした。それが近年では、人の誕生から死後の供養までに行われる節目の行事全体を指す、広い意味を持つようになってきました。このため本展示では、誕生以降のさまざまな儀礼もあわせて取り扱います。

江戸時代は現在に比べ乳幼児の死亡率が高く、元服を行う以前に亡くなることも多くありました。内藤家でも文化～天保期（1804～1844）の約40年の間に生まれた子ども12人のうち、7人が7歳を迎える前に亡くなっています。だからこそ健やかな成長を祝う儀礼が数多く行われました。

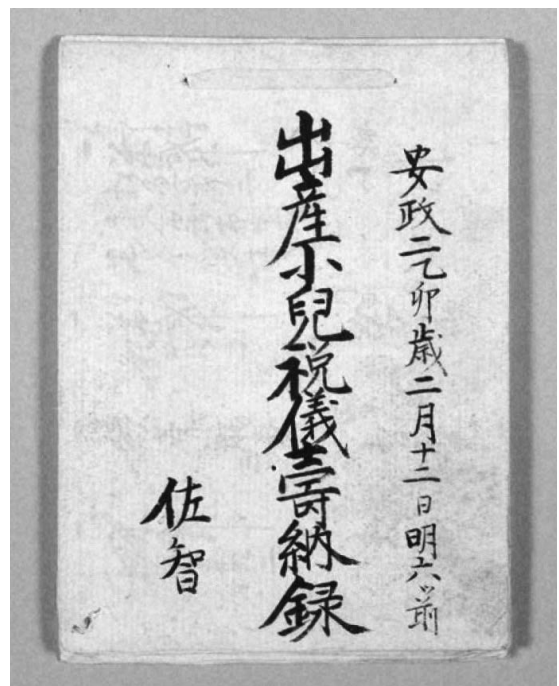
内藤家の日記には、七夜祝（今のお七夜）や宮参り、今の七五三にあたる五ツ祝（袴着）・七ツ祝（帯解）といった儀礼を行ったことが記されています。右の写真は、安政2年の2月に生まれた「さち」という人物の出産祝い・宮参りの際のお祝いについて記した帳簿です。この時は、宮参りにいたるまでの約1か月間に、縁戚や地域の親交ある人々から祝儀を貰っています。また、宮参りの日には、「孫祝ひ」という祝宴を開いて彼らを招き、本膳をふるまいました。また村人一同に祝儀として赤飯を配ったようです。

加えて、袴着・帯解の際に作成された帳簿からも、同様に人々を招き、祝儀として餅を配っていた様子が見えがえします。こうした儀礼は、子どもの出生や成長を近隣にお披露目するという側面

を持っていました。

そしてだいたい数え年12～15歳前後になると、元服の儀礼を行います。庶民の間で広まった元服は、前髪をおろして頭頂部を剃り、「月代」と呼ばれる髪型にするものでした。この元服を通じて正式な村の構成員として認められたのです。内藤家の日記には、6代目の重鎮が元服を行ったことが記されています。この時彼は数え年13歳でした。

ここでは紙面の都合上、元服にいたるまでに焦点を当てて紹介しましたが、展示では、内藤治右衛門家の資料から婚礼や葬式、供養についても取りあげます。ぜひ、会場で江戸時代の冠婚葬祭の様相を探ってみてください。（草山菜摘）



さち誕生に関する帳簿（本宿小野宮 内藤治右衛門家文書）



猿渡盛章肖像画（複製） 当館蔵

▼ 神職における官位取得

朝廷から与えられる官職と位階を、合わせて官位と呼びます。この官位は、律令制が導入された飛鳥時代の終わりごろに整備され、役人の序列を示す機能を持っていました。そして律令期には、位階によって、与えられる官職が決まっていました。たとえば、武蔵国の国司の長官（守）は、「従五位上」以上の位階を持つ者が任命され、「武蔵守」という官職を得ました。

しかし官職名は、時代が下るにつれて形骸化していきます。天皇の側近を務めた公家は例外ですが、江戸時代には、官職名の多くは、実務を伴わないものとなっていました。

とはいえ官職や位階が無意味な称号だったわけではなく、官位は大名や幕府の上級役人の序列を統制し、身分を示す表象として機能しています。

このように官位は、武家や公家が取得するものというイメージが強いですが、実は神職も取得することができました。江戸時代には、京都の吉田神社に奉仕する吉田家（卜部氏）の支配下に組み込まれた神社の神職は、この吉田家を通して官位申請を行いました。

また、吉田家当主と謁見する際には、吉田家の家老職である、鈴鹿家に取り次いでもらう必要が

ありました。鈴鹿家は4家存在しており、吉田家への取次を願う場合は、そのすべてに挨拶して、献上品を渡すのが慣例だったようです。

そもそも官位は、ある程度の社格を持つ神社の神職のみが得ることができました。そして彼らにとって官位は、神職全体の序列を示し、社格の高下を表す指標でもありました。これを踏まえると、官位取得を望む神職は多く存在したとみられます。

▼ 六所宮と官位申請

さて、六所宮（現・大國魂神社）の神主である猿渡家でも、吉田家を仲介に官位を取得した者がいました。その中から、猿渡盛章という人物の事例を紹介します。

猿渡盛章は、数え年8歳であった寛政9年（1797）に六所宮へ出仕し、文化7年（1810）の父の隠居を受け神主に就任した後、文久2年（1862）にいたる50年以上、その職を務めました。

六所宮の資料（大國魂神社文書）に、「任官願中旅宿日記」（以下任官願日記）という盛章の官位取得に関する日記があります。ここには、官位申請時の作法や先例について詳しく記載されています。

▼ 盛章の官位申請から取得まで

盛章が官位を申請したのは、文政9年（1826）9月のことです。8月30日に京都の吉田村（現・京都市左京区南部）に到着し、1か月ほど滞在しました。この期間に盛章は、この地に住む谷伊兵衛の家を「仮のすみか」としています。

翌9月1日の朝、盛章は伊兵衛の手を借りながら、「奉願官位之事」と「先例書」という2つの書類を作成しました。「奉願官位之事」には、「近江守」「従五位下」を申請する旨が記されています。一方先例書は、先代・盛房が信濃守・従五位下を取得していたことを記した書類です。

同日の昼、盛章は伊兵衛の案内で鈴鹿4家全てをまわりました。翌2日には、今回の申請で盛章を吉田家当主へ取り次ぐ鈴鹿陸奥守と、今後の予定について話しています。5日には、彼の案内で、吉田家当主に謁見し、口祝（前祝）として熨斗鮑を賜っています。その後吉田家当主は、10日に関白鷹司政通に盛章の官位申請を提出しました。

以上の申請の流れから、伊兵衛は盛章に対して、鈴鹿家への仲介役や、書類作成の手伝い、付き人の手配など様々なサポートを行ったことが分かります。彼の職分は不明ですが、官位申請者を補佐する役回りだったと推測されます。

盛章は、6日から21日までの間、同じく官位申請に来た筑前国杉守大明神（現・福岡県北九州市杉守神社）の神主千々和河内守と語らったり、1人で京都を観光したりして過ごしています。

そして22日に「従五位下」叙爵、23日には「近江守」任官の勅許を得ます。これらは吉田家邸宅で当主から直接言い渡されました。26日には、この勅許のお礼として御所へ赴き、進物（お金）を献上しています。右の写真はこの時に誰にいくら渡したかを記した「進物之覚」の一部分です。ここには、官位取得の際に手続きに関わった関白鷹司政通、武家伝奏広橋胤定・甘露寺国長、上卿徳大寺実堅、職事（蔵人）柳原隆光の名前が見えます。また、この写真以降の部分を見ると、上の人物のほかに、雑掌（雑務を行う者）や、吉田家・鈴鹿家へもお金を支払っていることが分かります。そしてこれら進物全体の金額は、金14両におよびました。

そして29日には、吉田家邸宅で、正式に官位取得したことを証明する、位記（位階を記したも

の）・宣旨（官職を記したもの）・口宣案（天皇の勅旨）の3つを賜りました。

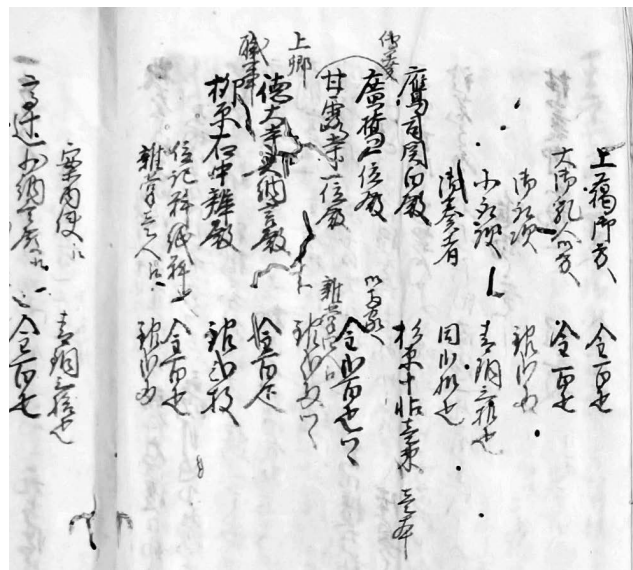
▼ 官位申請を行う意味

最後に、盛章がなぜ官位申請を行ったかについて考えてみましょう。

先述のとおり、神職の官位は神社の相対的な資格を示す指標ともなりました。取得することで、神社全体のなかでも権威を得ることにつながります。加えて、全ての神職が取得できるものではないため、官位を取得すると、地元の中での神社の位置づけが上がったとも考えられています。これにより申請者本人も、周りの神社からの信用を得ることができたとみられます。盛章もそうした権威向上を望んでいたのかもしれませんが。

また、任官願日記という、今回の件のみを記録した日記が残されているということは、盛章にとって官位取得が重要であったことを裏付けているといえるでしょう。また、後代に同様の官位申請をしたい人物が現れた際、参考にしてほしいと考えたのかもしれませんが。

盛章が従五位下・近江守を叙任された29日の記載には「多年心願成就大慶々々」とあり、官位を賜ったことを非常に喜ぶ盛章の様子がうかがえます。盛章にとって官位を得ることが悲願であったことは間違いのないでしょう。



「任官願中旅宿日記」内に記された「進物之覚」（部分）
（大國魂神社文書）

④ 戦時下で働く児童・生徒

戦争は大人だけでなく、本来学校で勉強に励むはずの児童・生徒にも大きな影響を及ぼしました。授業内容が軍事色の強いものになるだけでなく、児童・生徒が労働力として扱われるようになったのです。

1938年(昭和13)には、中等学校(現 中学校)以上の生徒にさまざまな労働へ従事させる、いわゆる「勤労奉仕」が行われるようになります。それは神社寺院の清掃から、戦争で働き手を失った家での家事や農作業の手伝い、または軍用品や土木に関する簡易な作業などです。この年は5～6日程度しか従事させていませんでした。それが翌年になると、年間30日まで授業日を作業に振り替えるようにカリキュラムが変更されました。その後、勤労奉仕の対象学年も中等学校からいまの小学校高学年、さらに中学年まで引き下げられたのです。

1942年になると、戦争で失った兵力や労働力を補うために、教育にも大きな変更が加えられ、勤労奉仕の日数は年間4か月にまで増やされました。1944年には、中等学校程度以上の生徒に対し、1年間の通年勤労働員が決まります。戦争の長期化・激化によって、学校で学ぶことよりも学外での労働が優先されたのです。

府中ではどうだったのでしょうか。1941年に日本各地で児童の集まりである少年団が組織されていくと、市制施行前の府中町、西府村、多磨村にも少年団が作られました。そこでは集団登校や神社の清掃といったことから、鉄くずの回収、服の繊維にする桑の枝の皮や苧麻の収集・供出なども行われていました。当時の府中市域では養蚕が営まれていたので、桑の枝の皮はかなりの量を得られたようです。当館には、1943年に多磨少年団の一部である是政男子分団に出した記録書があります(右写真)。それによると、是政の男子分団は桑の枝の皮110貫(約412kg)を集めたことがわかります。ほかにも燃料や食料にするカシの実や、家畜の飼料にす

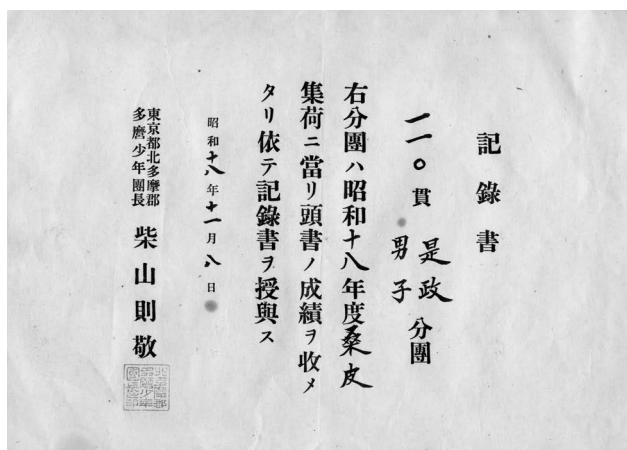
る茶殻も収集し、供出しています。

また、府中国民学校(現 府中第一小学校)の記録によると、田んぼの改良工事や麦踏み、堆肥用の草刈りといった農作業のほかに、医療用空瓶の回収、肥料にする灰の収集、皮をなめすタンニンを抽出するためのドングリ集めなどに児童を動員していました。また、旧陸軍調布飛行場ができると、多磨国民学校(現 府中第四小学校)の児童に滑走路の草刈りをさせたり、大雪が降ると一列になって雪を踏ませたりして、飛行機の離着陸ができるようにしました。

当時の回顧録をみると、こうした作業はみんなで集まるから楽しかったという記述もあります。一方で、物資不足のために裸足で麦踏みをした、雪踏みで足の感覚がなくなったなどもみられ、大変な状況下で働いていたことがわかります。

よく学び、よく遊ぶことが子供の本分。しかし、今回紹介した勤労奉仕の様子から、いまでは当たり前前のことが十分に出来ず、子供が働かざるをえなかった状況がうかがえます。

終戦から80年が経過した現在、戦争を経験したことの無い人が大多数となりました。だからこそ、府中に残る戦争の記憶・記録から当時の状況を知り、次世代へ継承していく必要があると思います。(荒一能)



桑の枝の皮集荷の記録書

「鷹」の墨書土器を発見



「鷹」の墨書

府中市にある古代武蔵国府跡とその関連遺跡では、これまでの発掘調査で様々な文字が書かれた土器を確認しています。こうしたなか、美好町1丁目で昨年行われた発掘調査によって、市内で初めて「鷹」と墨書きされた土器が発見されました。今回は、この「鷹」の墨書土器を紹介します。

発見場所は美好町公園の東側近くの発掘現場で、国府の中心的な役所群であった国衙跡から西北西に1kmほど離れた集落遺跡の一角です。この土器は奈良時代後半から平安時代初頭に作られた土師器杯の底部破片で、直径が約7cmあり、外面に「鷹」の一文字だけが書かれていました。

それでは、この墨書土器からはどのようなことが考えられるのでしょうか。古代において鷹の文字から思い浮かぶことに「鷹狩」があります。鷹狩とは調教した猛禽類のオオタカやハイタカ、ハヤブサなどを山野に放って鳥獣を捕捉させ、それを遣い手が取り上げる狩猟法です。

古代の鷹狩は天皇や貴族の遊戯として盛んに行われました。それに伴って各地から鷹が都に貢上されており、これはそのために全国の国府に養鷹機関が存在したことを示唆しています。つまり、今回発見された墨書土器からは、出土地付近に武蔵国府の養鷹施設があった可能性が考えられるのです。

また、出土地近くの美好町公園付近は、古代に都へ通じる官道（東山道武蔵路）が敷設されていた場所であり、この官道を使って鷹を貢上していた可能性も浮かびます。さらに、国府には都から派遣された貴族層の国司がいたため、国司自身が国内で鷹狩を行っていたことを想定して、この墨書土器の意味を考える必要もあるでしょう。

このように、「鷹」の墨書土器は、古代武蔵国府と鷹狩との関係を新たに考えさせる貴重な資料といえます。そして、時代は下りますが、近世には、徳川家康が本町の府中御殿に鷹狩の際に滞在し、尾張徳川家が府中北方地域を鷹狩場としました。時代はまったく異なるものの、こうした近世府中と鷹狩との深い関係も今回の墨書土器は思い起こさせてくれます。

美好町一丁目 府中市ふるさと文化財課

湯瀬 楨彦



墨書土器出土地点
(地理院地図「淡色地図」に加筆)



天文はじまり物語



④日本の宇宙開発のはじまり

天文・宇宙に関する様々な「はじまり」をお伝えしてきたこのシリーズも最終回です。

★ペンシルロケット

終戦から7年後の1952年（昭和27）。禁止されていた航空事業が再開され、日本でもジェット機などの開発が始まりました。そのような時代のさらに先を見据えていたのが、のちに日本の「ロケットの父」とも称される糸川英夫博士です。

糸川は1954年、ジェット機以上に知られていなかった「ロケット」を作るため、幅広い分野の専門家を招集します。ただ、彼が当初想定していたロケットは、宇宙が目的地ではなく、太平洋を20分で横断できる「ロケット旅客機」でした。

実験を行うために、ロケットを試作することとなりますが、研究開始時はまだ予算も物資も乏しかったため、糸川たちは既製の材料から、工夫してロケットを組み立てていきました。

最初のロケットは、戦時中バズーカ砲に使われていた火薬を燃料に転用し、その燃料をうまく詰められるサイズのパイプで胴体が製造されました。そして生まれたのが、直径1.8cm、長さ23cm、重さ200gの「ペンシルロケット」でした。

ロケットはもちろん空に向かって打ち上げるものですが、ペンシルロケットの実験では、水平発射、すなわち横向きに飛ばされました。最初の射場は、府中市のお隣、国分寺市の、現在の早稲田実業学校構内にありました。

水平発射したこともまた、必然ではなく、研究者たちの工夫の産物です。高速で上昇していくロケットを捕捉するレーダーがまだ作れなかったため、限られた敷地内で水平に発射し、高速度カメラや、電気信号を計測するオシロスコープで、ロケットの飛び方を観測したのです。都内で上に打ち上げると、回収が難しいこともおそらく関係していたでしょう。

★そして大空へ

ペンシルロケットで基礎的なデータを得た日本のロケットは、1955年に秋田県に場所を移し、いよいよ上に向かって打ち上げられます。この時のロケットは全長30cmの「ペンシル300」で、到達高度は600m。日本のロケットが空高く飛翔をはじめました。

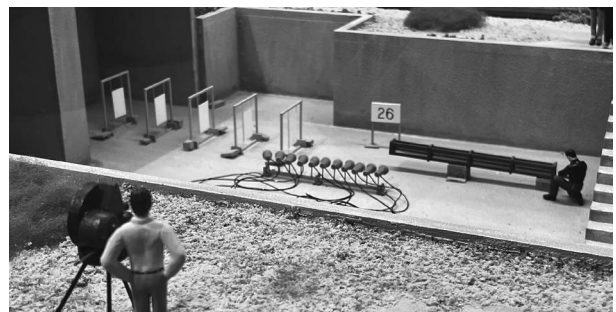
糸川の情熱に応えるかのように、日本は国際地球観測年（IGY）の宇宙観測に参加することを表明。2年後の1957年から翌年までの間に、宇宙を目指しロケットを飛ばすこととなります。

ロケットは急ピッチで大型化が進んでいきますが、まだ当時は馬車でロケットを運び、砂浜で打ち上げていた状態でした。しかしそこから日本のロケットは、数々の困難を乗り越え、期限内に高度60kmに到達。IGYに課せられていた観測の責任を無事に果たし、世界の宇宙開発の仲間入りをしたのです。

★夢の先へ

現在、日本が世界に誇るロケットたち。全長60mを超えるものすらありますが、それらすべてが、23cmのペンシルロケットをルーツとしています。

小さな小さなはじまりでしたが、大きな夢を持ち、それを叶え、そして夢すら超えていった偉大な「はじまり」だったのでした。（小林善紹）



ペンシルロケット水平発射実験場模型

ロケットを半地下壕で水平に発射し、高速度カメラなどで撮影、観測を行っている（国分寺市製作・当館展示）。